

「東日本大震災 災害活動報告」

宮城県気仙沼市消防団 団長 武山 文英



1 気仙沼市の概要

気仙沼市は、宮城県の北東端に位置し、リアス式海岸特有の丘陵が海にせり出した地形をしており、河口や谷間の平坦地を中心として市街地が形成されています。

東は太平洋に面し、湾の入り口に離島大島を配した天然の良港で、全国有数の漁業基地として各地の漁船が入港し繁栄してきました。

平成18年3月31日に唐桑町と平成20年9月1日に本吉町と合併しており、現在の気仙沼市の総面積は333.37km²で、宮城県内では7番目の広さです。

2 被害状況

平成23年3月11日午後2時46分、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0、震度6弱という国内観測史上最大規模の巨大地震を観測しました。

この地震により巨大津波が発生し、平成24年7月31日現在で死者1,203人、行方不明者254人、住家も全壊8,483棟、半壊2,568棟という甚大な被害を受けました。最大時で105箇所避難所が設置され、20,086人という多くの市民の方が避難生活を余儀なくされました。

本市消防団も消防団員860人中（震災当時）、9人（うち7人が消防団活動による



大型船が瓦礫の上へ



震災前の気仙沼沿岸です

殉職) が震災により尊い命を落としました。施設・設備の面では、消防ポンプ車2台、小型動力ポンプ付積載車10台、小型動力ポンプ10台が流失、消防屯所も95箇所中全壊31箇所、大規模半壊3箇所です。3分の1が使用不能となりました。

3 活動について

本市消防団では、震度5弱以上、津波注意報・警報発令で所属の消防屯所に参集し、広報活動・水門門扉の閉鎖活動・情報収集伝達活動・警戒活動などを行うよう事前命令により取り決められており、この大地震が発生した直後から、多くの消防団員が屯所へ駆けつけ、水門門扉の閉鎖、避難誘導活動を行っております。

津波により団員の家屋の流失・全壊が約220戸、半壊が約20戸と自身も被災している中で、地震発生から10日間ほどは不眠不休で消防団活動に当たり、その後も家屋が流出・全壊した団員は、避難所や屯所で寝起きしながら消防団活動を続けました。



震災後、石油タンクが23基ありましたが、津波で20基流出しました

13分団に分かれている消防団のうち、津波被害がなかった2つの分団には、被災している分団への協力と併せ、火災など万一の災害に備えるために、屯所に24時間態勢での待機を指示し、各分団では全団員協力してローテーションを組みながら、3月一杯は活動体制を維持しておりました。

本市消防団の主な災害対応活動は、避難誘導活動、情報収集活動、火災防ぎょ活動、救助活動、搜索活動、遺体搬送活動、公共施設清掃、夜間の防火・防犯活動でした。特に、震災直後の12日に、気仙沼警察署長



広域消防と協力し、救助活動にあたりました

より消防団へ協力要請があった搜索活動と御遺体の収容・搬送活動は、本来の消防団活動ではないとはいふものの、この非常事態の中ということで、19日までの約1週間にわたり実施しました。地域に密着して活動している消防団にとって、搜索活動中に発見・収容される御遺体の中には、団員自身の親類や知人もおり、活動に当たった団員の精神的ダメージは相当大きいものであったと感じております。このことから、後日、国の支援事業により専門家の派遣を頂き、消防団幹部向けの研修会を開催しております。こういった、大規模災害時の惨事ストレス対策は、今後も重要なものになっていくと考えております。

4 終わりに

昔から“津波てんでんこ”という言葉が伝わっておりますが、今回の大震災のような自然災害では、人間の力では何もできない、お互いがとにかく逃げるのが大切である

ということを表しているのではないのでしょうか。

大規模災害時において消防団員は、地域住民の生命を守るために活動しますが、安全を担保するには、人数的にも時間的にも限界があります。今回の震災で、一人でも多くの命を守るために、職務を全うした消防団員を失ったことは、大きな損失であり、決して、悲しみは癒えることはありません。

災害対応における体制の確立も必要ですが、やはり津波死ゼロを目指すためには、住民の意識改革が絶対であり、防災意識と知識の啓発に努め、自助共助の精神を確立しなければならないと考えます。

本市消防団も、この東日本大震災で消防力の低下がみられました。しかし、全国の消防団をはじめとする消防関係者の皆様からの御支援をいただきながら、現在は、復興に全力をあげて取り組んでおります。多くの方々との絆を感じ、そのパワーを糧に今後も消防団活動に邁進する覚悟です。



気仙沼消防署との沿岸地域の合同搜索活動